（１）小学校英語授業における

ICT を活用した小中学校の学びをつなぐ効果的な指導法について

四万十市立中村南小学校
有田　洋平

１．はじめに

中学校英語教員である私が小学校外国語教育に関わるようになって今年度で４年目となった。中学校に勤務していた頃には小学校で行われていた外国語活動についてはほぼ無知の状態であったが、令和元年度に四万十市教育研究所研究員となって小学校外国語教育に関わる僥倖に恵まれ、自らの研究として２年間小学校英語教育について研究をさせていただいた。そして、昨年度からは中村南小学校、中村小学校で外国語専科教員として実際に教壇に立たせていただき、指導実践を重ねてきた。中学校での実践、そして研究員として小学校外国語教育について研究した成果をもとに、小学校児童にとってどのような指導が可能で、どれだけの英語力を育むことができるのか研究を進めた２年間であった。本稿では、これまでの４年間の小学校英語教育に関する実践研究を標題のもとにまとめたい。

２．小学校英語指導法についての考察

令和２年度に小学校５，６学年で行われてきた外国語活動が教科化され、外国語科となった。検定教科書もでき、日本の外国語教育の大きな転換点となった。しかし、いまだ小学校でどのように外国語を指導していくのかについては、十分な実践と検証が行われているとは言い難い現状がある。実際に教壇に立っている教員も、小学校学級担任と外国語専科教員の場合があり、学校によって様々である。昨年度当初、英語専科教員として５・６年生に教科として外国語を教えるにあたり、これまでの指導経験や研究員としての研究を踏まえ、以下の点に則った指導法が効果的なのではないかと考えた。

（１）授業を Review（復習）-Presentation（提示）-Practice（練習）-Production（産出）をもとに構成する。
（２）全ての単元で児童が自分の考えや意見を英語で話すパフォーマンステストを行う。
（３）単元ゴール活動で英語を話す相手はネイティブスピーカーか、あるいは自分よりも英語に熟達した者とする。
（４）児童に単元ゴールを達成させるため形成的評価と指導改善を行う。
（５）授業をブロック化する。

以上の５点を基本として授業、単元を構成し、実践を行った。以下に詳述する。

（１）授業の構成

原則として１時間の授業構成を Review（復習）→Presentation（提示）→Practice（練習）→Production（産出）の流れで構成した。この Review を省いたＰＰＰによる指導は、日本でよく行われてきた指導法であるが、生徒がある文法項目を理解した後で十分に Practice（練習）を行い、その後英語を Production（産出）する指導手順であるため、実際の英語運用能力を育成することができないとして批判を受けている。しかし、英語が外国語である日本の言語環境においては、この指導法が有効なのではないかと思われる。日本は、学校の英語授業以外で日常的に英語を使用する機会があるというような、英語が第二言語となる言語環境を持っていない。よって、授業の中で指導者からの Presentation（提示）がなければ英語に触れる機会はほぼ考えられず、外国語の授業で英語でのインプットがなければ、児童は新しい言語表現をアウトプットすることは不可能である。もし、日本が外国語の授業以外でも英語を使う必要がある言語環境であれば、授業の中で新しいインプットが無くても、授業以外でのインプットをもとに新しい言語表現をアウトプットすることは可能であろう。しかし、授業以外でインプットを得ることができない日本のような言語環境では、授業の中でできる限り多くのインプットを与えることが必須であり、児童はそれをもとに英語をアウトプットする。よって児童のモデルとなる英語表現を与える Presentation（提示）は、必須である。

次に、Practice（練習）もパタンプラクティスのような自分に関わる内容の乏しい口頭練習は効果が薄いとの指摘があるが、英語は日本語とは音声や文法構造が大きく異なる言語であるため、英語の発音や文の形を学習して発話するためには、最低限のドリル練習は必要であると考える。そして、肝要なのは、このPractice（練習）をできる限り児童が自らの意見や考えをアウトプットする“言語活動”とすることである。児童の実際の思考や日常生活とかけ離れた内容の英語表現を使って練習するのではなく、児童が本当に考えていることや、日常生活に即した内容の英語表現を使わせるように指導者が導くことが大切であると考える。また、ここで児童に自分の考えをアウトプットさせる時に大切なことは、インプットの量である。児童に与える英語表現が少なければ、児童は与えられた表現を使う以外になく、全ての児童が同じようなアウトプットを行ってしまう恐れがある。これが、児童にモデルを与えるべきではないという考えにつながっている。しかし、児童が本当に言いたい事を英語で表現するためには、潤沢なインプットが与えられなければならない。多くの英語表現が与えられることによって、児童はその中から自分の考えと同じか、あるいは似通った英語表現を選択することができ、自分で内容や話す順番を工夫しながらアウトプットできることにつながっていく。そして、単元の進行に伴って、児童が本当に話したい内容をアウトプットできるように指導者が導きながら児童の言語活動の量を増やしていき、最終的には児童が本当に伝えたい事をProduction（産出）できるように単元を構成することが有効なのではないかと考えた。

授業の中で子どもにモデルを与えるとそのモデルと同じ英語しか使わなくなるため、モデルを与えるべきではないとの考えがある。しかし、インプットがなければ、アウトプットは不可能である。問題はインプットの量と、そのインプットをどのように使うのかを指導することだと考える。児童に多くのインプットを与え、そしてその中から自分が本当に使いたい英語を選択し、そしてそれを伝える相手のことを考えながら自分の言いたい事が効果的に伝わるように順番を変えたり、自分が言いたい事を付けたしたりすることを指導することが重要であると思われる。

最後に、授業の最初にはReview（復習）があることが望ましい。小学校外国語の授業は年間７０時間しかなく、週２時間しか児童は外国語に触れる時間がない。また、音声中心の指導であるため、学習した英語を記憶に留めておくことが難しい児童も多々いる。そのため、授業で新出の指導事項を取り入れる前には既習事項である語彙や英語表現を思い出すためのReview（復習）が必須であり、これが授業をつなぐ働きをする。以上の考察より、授業の構成は、Review（復習）-Presentation（提示）-Practice（練習）-Production（産出）を基本とした。

（２）パフォーマンステスト

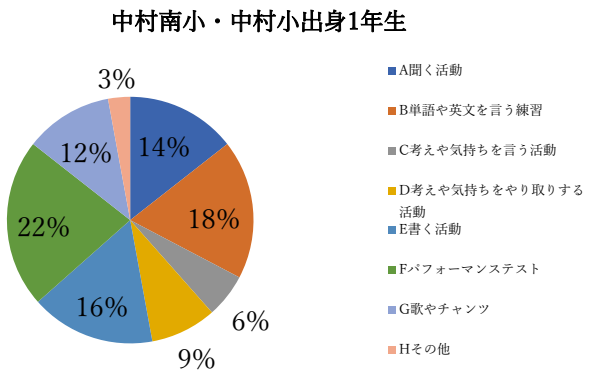
昨年度より５，６年生の全ての単元で児童が英語を話すパフォーマンステストを行い、評価を児童に返却することを計画し、実践した。各単元を基本的に８時間で構成し、各単元の７時間目か８時間目にパフォーマンステストを行った。小学校外国語では、パフォーマンステストは学期に数回とされているが、各単元で学習する表現を使って英語を話すテストを行うことで、児童が授業で学習したことを実際に使えるようになることを実感できるのではないかと考えた。また、このパフォーマンステストの他に市販のリスニングテストも使用して評価を行っているが、これだけでは児童が授業で身に付ける力を測るには十分ではないと判断したためである。

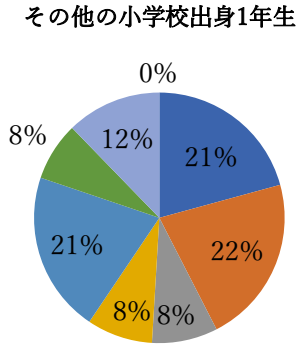
「話すこと」のパフォーマンステストを行う際には、児童は英語で原稿を書くことはせず、マッピングなどの思考ツールにまとめた自分の言いたい事柄を見ながら、あるいは発表のために作成したスライドを見ながらスピーチを行った。小学校では児童は英文を自らの力で書くことは求められておらず、十分に話したり聞いたりして慣れ親しんだ英文を書き写すことしか指導していない。また、原稿を書いてしまうと、それをただ読むだけになってしまう恐れがあるため英語を話す力がついているとは考えられず、思考ツール、絵やスライドを見ながら自分が言いたい事を英語で表現できるようにくり返し指導した。

パフォーマンステストはＡＬＴとともに一人一人の児童の話す英語を聞いて評価を行った。「話すこと」の評価は、山田（2018）を参考に①態度、②内容、③正確性の３観点とした。①と③はＡＬＴが評価を行い、②については私が評価することとした。これは、児童がスピーチを行う相手はＡＬＴとしたためで、②の内容は児童が伝えたい内容自体を評価し、英語の正確性は問わない。

多くのパフォーマンステストが「話すこと【発表】」でのテストとなってしまったが、昨年度私の授業を１年間受けた中村南小学校と中村小学校出身である現在の中村中学校１年生に小学校の英語授業

の中で最も役に立ったことは何かを問うアンケートを行った結果、パフォーマンステストと回答した生徒が最も多かった。右のその他の四万十市立小学校出身の生徒の結果と比較するとその結果は大きく異なっている。パフォーマンステストの実施が私の実践の大きな特徴であることがうかがえる。





アンケートには役に立ったと思う活動の理由を尋ねる記述式の問題も設けていたが、生徒の記述を見てもパフォーマンステストが役に立ったという回答が多く見られた。以下に示す。

・小学校の時にも ALT の先生たちに英語を話すテストをやっていたので、中学校になっても緊張せずにすることができて役に立った。
・パフォーマンステストをするのは変わってなくて、やっていたことを使えたから。
・中学校では小学校と同じくグループで話し合ったり考えを言ったりすることが多いし、パフォーマンステストでグループで話し合ったことを生かすことができるから。
・パフォーマンステストは小学校でもやって、順番ややり方などが役に立っていた。

また、パフォーマンステストの効果についての記述も見られた。

・英語を話せば話すほど頭に入ってきて覚えやすいから。
・英語を話す力がついたから。
・練習を繰り返すうちにいろいろなことが印象に残って覚えられたから。
・自分が練習して、その実力を試すので普通の練習よりももっと役立つ。

このようなパフォーマンステストの実施は児童生徒の小学校と中学校の学びをつなぐ働きをも果たしていると言えるのではないだろうか。

（３）単元ゴール活動で児童が英語を伝える相手

英語を話す単元ゴール活動を行う際には必ず話す相手が必要となるが、それをできる限りＡＬＴとした。その理由は、英語を話す必然性があるからである。児童が英語を話す相手が、日本語が理解できる日本語話者であれば、児童は英語を話す必要性を感じることは難しい。英語でしかコミュニケーションができないＡＬＴが相手であるからこそ、児童は英語を話したい、英語を話さなくてはいけないと考えるのではないだろうか。また、相手がＡＬＴであるからこそ、自分がＡＬＴに伝えたいという気持ちに沿って発音に気をつけたり、声の大きさに気をつけたり、伝え方、内容を工夫するのではないだろうか。さらに、相手が英語を理解できるネイティブスピーカーであればこそ、より高度な英語を話そうとする姿勢を育てることができるのではなかろうか。これは外国語の見方・考え方を育成する手段としても有効であると思われる。

現在、四万十市は勤務しているＡＬＴの人数が多く、多くの小学校でほとんどの授業にＡＬＴが入る体制が整っているため、児童に英語を話す必然性を感じさせやすい。四万十市のＡＬＴの活用方法として最も効果的であると思われるのは、英語を話さざるを得ない相手としてＡＬＴを児童に実感させることであり、単元ゴール活動の相手として設定することであると思われる。普段から教員が授業や授業以

外でもＡＬＴと英語で会話している姿を見せることで、児童によりＡＬＴを、英語を話さざるを得ない相手として実感させることができる。また、授業中に英語表現の正確性をその場で、即座にＡＬＴに確認できることは教員にとっても大きな助けとなる。

（４）形成的評価と指導改善

単元ゴール活動における目指す児童の姿、言語表現を決め、バックワードデザインで一つ一つの授業でどのような英語表現を学習させ、使わせていくのかを計画し、実際に授業を進めていくと、単元の途中で形成的評価と指導改善が必要となる。当初の単元、授業計画通りに児童が表現を使えるようになっていっているかどうかは適宜チェックする必要があり、そうしなければ児童が目指した姿に到達できないことがあり得る。小学校外国語授業は週に２時間しかないため、綿密な計画と形成的評価が無ければ児童を目指す姿に導くのは難しいと感じている。単元の途中で毎時間形成的評価を行うことで、これまでの授業での指導を振り返り、単元ゴールにおける児童の姿を達成するためにはどのような指導が足りないのか、あるいはさらに高みを目指せるなら何が必要かなどを確認することができる。そして、授業の構成や指導の手順などを変更、改善し、全ての児童を単元ゴール活動で目指す児童の姿へと導けるように指導を行った。

（５）授業のブロック化

「授業のブロック化」とは、授業を１時間単位で見るのではなく、一つの単元や、あるいは学期、年間単位で見ることである。１時間１時間でできるようになることを考えるのではなく、１単元でできるようになることを考えて、授業を進めていく視点である。もちろん、１時間の授業での指導事項を確実に指導はするが、指導事項によってはそれができるようになるかどうかはその授業だけで判断せず、単元を通して継続して指導を行い、単元ゴール活動でできるように導くことである。これは、言語の習得には時間がかかり、繰り返しが必要であるとの見方に則っている。特に小学校では、音声面での指導が中心であり、英文を書いたり読んだりする指導は少ないため、１時間の授業で学習した英語を書き留めておき、児童が授業で学習したことを自分で見返すことはできない。そのため、単元を通して単元ゴール活動につながる英語を話したり聞いたりする言語活動を単元の最初の段階から毎時間行い、徐々に、しかし確実に話せるよう導くことが必要である。１時間単位で授業を構成し、指導するのではなく、単元ゴール活動への道筋を見据えたうえで、単元を貫く言語活動を毎時間設定し、単元が進むにつれて言語活動の質、量を高めていくことが重要である。そして、さらに学期でできるようになること、学年でできるようになることも見据えて継続して言語活動を高める指導をしていくことも必要であろう。外国語授業が始まる５年生の最初の単元ゴール活動での目指す姿と、６年生の最後の単元での目指す姿を描いたうえで日々の授業を行っていくことが理想的である。

このような視点をもって授業を行った結果、児童の振り返りの中には「(単元ゴール活動をすることが）最初は無理だろうと思っていたけど、だんだんできるようになって、練習してきてよかった」「前回の授業では言えなかったけど、今日は言えるようになった」「次の授業では言えるようにがんばる」などの授業間のつながりを児童自身も感じていることがうかがえる記述が多々見られるようになった。

３．ＩＣＴを活用した授業

昨年度より、ＧＩＧＡスクール構想のもと、四万十市内すべての小中学生に一人一台端末が導入され、英語授業においても活用方法を模索してきた。今年度は５、６年生のほぼすべての単元で１回以上Chromebook を活用することができた。いくつか効果的であったと思われる活用方法を紹介したい。

（１） インターネット検索・翻訳機能

まず、児童にとって最も手軽で、簡単な活用方法はインターネット検索・翻訳機能である。現在、外国語授業では、言語活動を行う際には、これまで学習した英語表現を繰り返し使って行うことが奨励されている。しかし、児童が本当に表現したいことを既習事項のみで表現することは大変難しいと感じている。児童が小学校で学習できる英語表現はごくわずかであり、児童が本当に表現したい英語とは大きな隔たりがある。そのため、私の授業では、試行的に、もし児童が話したい表現がある場合には、中学生で学習するレベルで、それほど語彙的、文法的に高度なものでなければ指導するようにした。先述したように単元ゴール活動での英語を話す相手はＡＬＴであるため、話す英語が多少難しいものであって

も理解してもらえることは明らかであり、児童がより高度な英語にチャレンジする意欲も喚起できる可能性があるからである。そこで、インターネットの検索機能を活用すれば、自分の話したい英語を調べることができ、その場で音声をも聞くことができる。これまでの英語授業では、教科書に書いてある単語については学習することはできても、自分が本当に使いたい英語を調べるためには辞書が必要であった。しかも、児童生徒が自分で音声を聞くことはできなかった。しかし、授業で一人一台端末が使えるようになった現在、小学生であっても自分の言いたい表現を調べることができ、音声も聞けるようになったのである。ただ、検索・翻訳機能は完全なものではないため、指導者の指導は必ず必要ではある。しかし、児童が自ら使いたい英語表現を調べ、音声を聴くことができることは大きな利点ではないだろうか。

（２） パワーポイント、スライド

小学校外国語授業では、児童に英文を読むことを指導しないため、ほぼ音声のみで指導しなければならず、ピクチャーカードや、パワーポイント、スライドを使った視覚支援が欠かせない。中学校での指導においても、絵や写真を使った指導は大きな効果があるが、小学校では必須である。音声だけでは理解が難しい英語であっても写真や映像があれば、児童はそれらを手掛かりに英語を理解することができる。

教員が一枚の写真を準備し、児童に提示すれば、その写真が話題を提供し、教員、ＡＬＴ、児童の間で英語でのやり取りが可能である。一枚の写真であっても、それについて①教員とＡＬＴ、②教員と児童、③ＡＬＴと児童、④児童と児童の４つのやり取りの可能性が生まれる。この４つのバリエーションの中で、指導事項や児童の実態に合わせてどの形で言語活動を行うかを選択する。児童にとってのやり取りまでの難易度が①→②→③→④と上がってくため、この順序でやり取りの練習をしていくことも考えられる。さらに、提示する写真の数を増やせば、さらにバリエーションが増え、多くの言語活動を行うことができる。

また、児童にとってもGoogleスライドは扱い易く、スピーチを行う際には各自工夫してスライドを作成し、それだけをたよりにスピーチを行うことができた。

（３） 動画撮影、提出機能

授業で児童に言語活動を行わせ、中間指導を行い、再び言語活動を行わせるという指導手順が叫ばれて久しいが、中間指導の行い方については実践、研究が積み重ねられているところである。中間指導の方法としては、1回目の言語活動を行わせている間に教員が児童が話している英語を聞き、全体に指導したい表現を捉えて児童を意図的に指名して全体に発表させ、中間指導を行い、それを踏まえて2回目の言語活動を行うという手順が一般的であると思われるが、人数の多いクラスではこの全体に指導したい内容に見合った英語を話している児童を捉えることは簡単ではない。児童の実態を理解し、指導したい内容を事前に準備したうえで中間指導を行うことが大切だが、いかに準備をしたうえで授業に臨んでも児童が予想通りに動いてくれる保証はない。そこで、確実に中間指導を行う手段として、Chromebookの動画撮影機能とクラスルームの動画提出機能を使うことによって、確実に全体指導ができ、さらに個別最適な指導を行うことができる。

もし、授業で中間指導で指導したい事項をその場で指導できなかったとしても、児童に実際に英語を話している動画を撮影させ、それを提出させて一人一人確認すれば、次の授業にはなるが、指導を行うことができる。動画は何度でも確認をすることができるので、確実に指導したい場面を捉え、その動画をクラス全体に見せながら指導を行うことができるのである。これは、大きな利点である。

また、人数の多いクラスになればなるほど、実際に一人一人の児童が話している英語を確認することは難しくなる。人数の多いクラスになれば、児童が指導した英語をきちんと話せているのか、正しい発音で英語が話せているのかを確認することは不可能に近い。しかし、一人一人に動画を撮影させることで、全ての児童の話している英語を確認することができ、一人一人に中間指導を行うことができる。クラスルームの機能を活用すれば、教員が動画提出の課題を児童に出すことができ、児童が動画を提出できる。児童の提出状況もその場で確認できるため、児童は英語を話さざるを得ない。さらに、動画を確認した後、一人一人にコメントを付けて返却することができるため、個別最適な指導ができる。この機能を活用するようになって、一人一人の児童に適切な指導助言ができるようになり、児童の単元ゴール活動での話す英語の質も向上した。

（４）オンラインでのスピーチ

６年生の最後の単元であるUnit 8 My Future, My Dreamにおいて、中村中学校英語科と連携して単元ゴール活動を行った。単元ゴール活動を、「自分のことを知ってもらうために中村中学校１年生に中学校生活や夢について紹介しよう」として、ClassroomのMeet機能を活用して画面上に写る中学校１年生を相手に、中村南小、中村小の全ての小学校６年生が一人一人スピーチを行った。最初は６年生の中には、大人数の中学生を相手にスピーチをすることに難色を示すものもいたが、単元を進める中で中学校から送っていただいた中学校１年生のスピーチを見たり、スピーチの練習を繰り返したりするうちに自信を持てるようになり、無事すべての児童がスピーチを行うことができた。特に自分が知っている先輩である卒業生からのスピーチは効果的であり、複数の生徒のスピーチを毎時間最初に児童に視聴させた結果、児童は意欲を持って言語活動に取り組んだ。相手が先輩であるということもあってか、児童はこれまでの単元の中で最も意欲的にスピーチをすることができ、単元ゴール活動の「目的・場面・状況」の設定の重要さを改めて感じることができた。児童は、上述した動画撮影のためにこの単元に至るまでにChromebookに向かって話すことを多く経験しているため、Chromebookに向かって話すことにも慣れていたこともこの単元ゴール活動が成功した一因であろう。また、授業の最後にはスピーチに対して中学生からコメントをもらうことができ、児童は中学校生活への展望を持てたのではないかと思う。

４．成果と課題

小学校で２年間外国語の授業を行ってきて成果だと思われることは、これまで述べてきたように小学校外国語授業をどのように行うのか、一つの実践例を示せたことである。しかし、児童に実際にどれだけの英語力が身に付いたのかは現在、検証のしようがない。児童が小学校で身につけたことが中学校での英語学習の下支えとなっていることを願うばかりである。

１学期末と２学期末に、中村南小学校、中村小学校の５，６年生を対象として英語授業に対する意識アンケートを行い、英語授業の効果と英語に対する意欲について尋ねた。効果は「英語を聞いて分かるようになった」「英語が話せるようになった」「アルファベットを見て発音できるようになった」の三項目について尋ねたが、全ての質問で、肯定的回答が１学期を２学期が下回る結果となった。意欲は「英語を聞いて分かるようになりたい」「英語を話せるようになりたい」「英語を書けるようになりたい」「英語を読めるようになりたい」の４項目について尋ね、「書けるようになりたい」が唯一２学期の結果が１学期を上回ったものの「そう思う」と答えた強い肯定的回答結果を見ると全ての項目で２学期が下回る結果となった。この結果は授業での指導が十分でなく、児童の意欲も伸ばせていないことを示していると思われ、取り組みの検証が必要である。単元ゴール活動をどのように設定し、それに向かってどのように授業、単元を構成すれば児童の意欲を引き出し、英語力の伸長を児童が感じることができるようになるのかが大きな課題として残った。小学校での教科としての英語授業は始まったばかりであり、これからも実践、検証を行っていかなければならない。

参考文献：

大津由紀雄・亘理陽一（編著）(2021)『どうする、小学校英語？　狂騒曲のあとさき』慶應義塾大学出版会

佐藤臨太郎・笠原究・古賀功（2015）『日本人学習者に合った効果的英語教授法入門　EFL環境での英語習得の理論と実践』明治図書

白畑知彦（2021）『英語教師がおさえておきたいことばの基礎的知識』大修館書店

瀧沢広人・渡部正実（2022）『指導のアイデア満載！　英語授業のタブレット活用』学陽書房

山田誠志（2018)『自分の本当の気持ちを「考えながら話す」小学校英語授業―使いながら身に付ける英語教育の実現』日本標準

ショーン・ローウェン（著）佐野富士子他（訳）（2022）『学びの場での第二言語習得論』開拓社

サラ・マーサー ゾルタン・ドルニェイ（著）鈴木章能 和田玲（訳）(2022)『外国語学習者エンゲージメント　主体的学びを引き出す英語授業』アルク